GyouseiNews.Com
The Gyousei Chosa Shimbun
行政調査新聞

＜川越市＞

川合市長、議会最終日に「市長減給」パフォーマンス！

さらに「呼び捨て市長」問題は静かに波紋を広げていた！

川越市議会第 3 回定例会(6月議会)が6月 25 日に最終日を迎えて閉会となった。

本会議直前の議会運営委員会では、補正予算に関するいくつかの追加議案が市の執行部から提出されたのだが、その中に、なんと川合善明市長の給料を減額する議案（「議案第 71 号 川越市長等の給料の特例に関する条例を定めることについて」）なるものが盛り込まれていたのである。結果「市長減給議案」は全員一致で可決され、川合市長は今後2年間、総額およそ７８８万円の給料減となった。ニュースの見出しのようにここだけ読めば、コロナ禍の市民感情にも（今更ながら）寄り添い、自らの市政運営の失態を反省する川合市長の殊勝な態度に思える。

だが、その後の本会議での「粂真美子市議による質疑」での市長答弁は、減給の具体的な理由や効果について何も説明できないまま、これが単なる川合市長の漠然とした「言い訳」の伏線として思いついたかのパフォーマンスでしかないことを露呈した。

一方、**本紙既報**の本議会での市長による「市民呼び捨て」問題は、議会中も予想を上回る読者からの反響が本紙に寄せられていた。今回は市長減給議案を巡る議会の様子と、「市民呼び捨て市長」の開き直りに頭を抱える教育行政の現場をレポートし、6月議会の総括として川合市長の闇に迫る。

本会議前から「白い目で見られた」市長減給パフォーマンス

議会最終日午前 10 時、本会議前に開かれた議会運営委員会では一般会計・水道事業会計・公共下水道事業会計の補正予算などが提出された。追加議案でよく見られる補正予算だが、同委員会を傍聴しメモを走らせていた本紙記者は、委員長の次の言葉に思わず**「え？」**と声を上げそうになった･･･

では、次。「議案第 71 号 川越市長等の給料の特例に関する条例を定めることについて」ですが･･･ なんと川合市長の減給議案である。

正しくは**市長の給料が月額 20％、副市長・教育長・常勤監査委員の給料が月額 10％、上下水道事業管理者が月額7％の給料減額で、川合市長以下市の特別職の給料カットを諮る執行部提出の議案**だ。減給の期間は、**令和3年(2021 年)7月1日～令和5年(2023 年)6月 30 日**までの２年間だという。執行部からの、この唐突な議案はいったい何であろうか？

自治体における同様の議案（**市長や執行部要職の給料減額**）は、始めから本会議に上程されていることが普通だ。補正予算などの追加議案は、言ってみれば議会での微調整とも言えるもので**「いいですね？」「いいですよ」**という、良い意味での予定調和である。しかし、市長以下特別職の給料減額となれば話は別だ。

市長が自分の給料を下げるというのなら（**特に川合市長の場合には**）市政関係者でそれを止めようとする者は誰もいないだろう。**「ああ、どうぞどうぞ」**というものだ。だが副市長はともかく、市長の道連れに 10%の給料減となる教育長や常勤監査委員は堪ったものではあるまい。委員会では、これら給料減額の理由や２年間という期間の根拠なども一切説明はなかった。議会関係者にこの条例案について尋ねると、**「ただの市長の思いつき。パフォーマンスだよ」**と、ため息交じりの返事。別の関係者は**「市長がやるって言ってるんだから、勝手にやらせておけばいい」**と辟易した様子で答え、**「粂さん**（粂真美子市議：無所属）**が質疑するから傍聴したらいいですよ」**と言い足してくれた。

まさしく、今議会で川合市長が「市民を呼び捨てにする理由」を問われた答弁で、得意満面に引き合いに出した中国故事の「白い目」を、議員全員から向けられた議案だったのである。

理由なき給料減額？

前述議会運営委員会後、午後１時から本会議最終日を傍聴した。

まず、６月１日議会開会日に提出された議案について、各常任委員会の委員長報告がおこなわれ、１件の請願が不採択になったものの、すべての議案が原案可決。同意案件もすべて同意で、議会は速やかに進行した。その後、副市長が追加議案の説明を行い、質疑に入った。午前中に議会関係者から聞いた通り、**粂真美子市議が問題の市長減給議案の質疑**に立った。粂市議は、川合市長が在任中４回にわたって市の常勤特別職の給料減額条例を定めてきた事と、市長自身がその度に答弁してきた減給の理由を挙げた。

粂真美子市議

1回目、2回目はいずれも改革の姿勢を率先して示すため、そして掲げた選挙公約によるもので、3回目は平成 29 年台風 21 号の際、適切な初動対応ができなかったことや、災害対応が十分機能していなかったことに対する責任としての減額。

４回目は昨年７月から12月末日までの半年間、新型コロナウイルス感染症に関する社会情勢に鑑み、市長等の姿勢を示すため定めたものと認識しています。
今回の条例案は５回目となるものであり、何点か質疑を申し上げます。

1回目の1点目としまして、本議案を提出された理由についてお伺いをします。
２点目、市長以外の特別職の給料も減額する理由についてお伺いをいたします。
３点目、給料の減額の割合を決定した理由についてお伺いをいたします。
４点目、給料を減額する期間を２年間とした理由についてお伺いします。
条例では川越市特別職報酬等審議会を設置することが定められており、市長･副市長･教育長･常勤の監査委員及び上下水道事業管理者の給料の額に関する条例を議会に提出しようとするときは、あらかじめ額について審議会の意見を聴くものとされています。
５点目に、本条例案において川越市特別職報酬等審議会に諮問されたのか。また、していないのであれば、その理由についてお伺いしまして1回目の質疑といたします。

これに対する川合市長の答弁の、まず３点目までを見てみよう。

川合善明市長

ご答弁申し上げます。
1点目、本議案を提出した理由でございます。特別職の給料の月額を減額することにより全庁的な行財政改革の推進にかかる取り組みに対する姿勢を示すものでございます。

２点目、市長以外の特別職の給料を減額する理由でございますが、私の給料を減額するに当たり、他の特別職からもその給料を減額することにつき賛同を得ることができたため、他の特別職の給料につきましても減額することといたしました。

３点目、減額の割合の理由でございます。本市において過去に私がおこなって参りました常勤の特別職の給料の減額の状況を踏まえ判断したところでございます。なお上下水道事業管理者につきましては、その給料が公営企業会計から支出されていることを考慮し減額の割合を７％といたしました。

これこそカラオケに次ぐ川合市長の十八番とでも言うべき倒錯答弁の典型である。
特別職の月給を減額することが全庁的な行財政改革への取り組みの姿勢だと答えた市長は、しかしながら、その具体的な理由をまったく説明できていない。本来は行財政改革の具体的な各論があったうえで、その実現性に向けた方法論（取り組み）として、はじめて特別職の減給議案が提出されるのがスジというものだ。

川合市長の答弁は順序が逆で**「減額してから、その理由を考える」**というもので、市議全員が**「市長のパフォーマンス追加議案」**と呆れたのも道理である。

教育長と上下水道事業管理者が**「全庁的」**？

減給対象に選ばれし**「特別職とは何者」**か

２点目の「私の給料を減額するに当たり、他の特別職からもその給料を減額することにつき賛同を得ることができた」などという答弁も噴飯もので、そもそもなぜ教育長や上下水道事業管理者が減給対象になったのかの説明がないのである。

結果、可決された本条例で減給となった特別職とは、**川合善明市長、副市長2名**（栗原薫氏・宍戸信敏氏）、**常勤監査委員の中沢雅生氏**、そして**新保正俊教育長と、上下水道事業管理者・福田司氏**のことであり、川越市では、市長を含む上記６名が常勤特別職の全員となる。

そのうえで素朴な疑問（**というより疑念**）として、教育長と上下水道事業管理者が、市長答弁による**「全庁的な行財政改革」**と具体的にどのように関係があるというのか？

副市長と常勤監査委員であれば職務の専門性からも**「全庁的行財政改革」**に取り組む意思表明とやらを理由とする減給も不自然ではないが、なぜここで**教育長と上下水道事業管理者が一蓮托生に**されているのだ？

逆にその具体的な説明が川合市長に出来ないのであれば、特別職は、単に市長に言われるまま減給に従っただけのことになる。事実、市長以下の特別職は市長が選んだ人材なのだから、市長に減給を言われれば同意せざるを得ないに決まっているのである。

川合市長は自分に逆らえない特別職を**「共演者」**として、自分が誠意を持って市長職に臨んでいるとのポーズが狙いの減給パフォーマンスを、そうではないように見せるためだけに利用したに過ぎない。いずれにせよ、川越市政のすべての責任は首長たる川合善明市長にあることは間違いないのだから、**「全庁的」**との川合市長の言い草は巨大なブーメランとなって、そのまま川合市長に返ることになる。

従って、川合市長ひとりが勝手に減給すれば良い（**むしろ、その蓋然性は極めて高い**）だけのことで、具体的に責任を負う立場にない職員まで道連れにするとは、つくづく川合市長の卑劣（**控えめに言っても支離滅裂**）なやり口である。

川合市長の得意技**「苦しくない言い訳」**

条市議の質問４点目、５点目に対する市長答弁も、以下のように延々と抽象言語を並べるだけの**「後出しジャンケン」**が続いた。

川合善明市長

４点目、期間を２年とした理由でございます。

このたびの減額は、全庁的な行財政改革の取り組みへの姿勢を示すものでございます。

現在、行財政改革にかかる取り組みの方向性や内容を整理検討しており、方向性が整った後は、具体的に取り組んでいく予定でございます。このため改革の成果の検証などをおこなうためには、令和４年度までは必要であろうと考えたところでございます。

また新型コロナウイルス感染症の状況及び、それによる社会経済への影響についても、ワクチン接種が今後進むことにより、その頃には一定の方向性が見えてくるであろうと想定されるところでございますので、このような諸般の事情を総合的に考慮し２年間としたところでございます。

５点目、特別職報酬等審議会への諮問についてでございますが、今回の議案は私を始め特別職の行財政改革に取り組む姿勢を示そうとするものでございますので、特別職報酬等審議会には諮問をしておりません。

具体的な根拠が皆無の**「全庁的な行財政改革」**に整理検討も方向性もあろうはずがない。

特別職報酬審議会を経ていないのも当然で、この内容では諮問のしようもない。

これら川合市長の答弁は**「苦しくない言い訳」**だ。まともな神経の持ち主であれば、言い訳とは心苦しいものなのだが、言い訳の名人・川合市長にかかれば呼吸と同じく、なんらの苦悩もないのだろう。議場には不毛な空気が漂うばかりである。

「全庁的行財政改革」が市民の責任なのか？！

最後は**「開き直り答弁」**で閉幕

内心では、まともに相手をしていられないであろう市長答弁に対して、それでも議会と市民を軽視、愚弄するかの川合市長の開き直りを看過するわけにはいかないとばかりに質疑を重ねる条市議は、次のように直言した。

条真美子市議

給料の減額の割合につきましては、過去の事例を判断材料にされたとのことでしたが、これまで減額したことで事態は改善されたのか、あるいは責任が果たされたのか、そうした検証がなされた上でなのか、根拠がいま一つ乏しいようにも受け取られます。

（中略）

今回の上程に当たっては、減額により行財政改革への姿勢を示すという市長の思いは汲むことはできます。一方では新型コロナウイルス感染症も再拡大が懸念され、地域経済

への影響も計り知れない中にあって、市民が市長に強く求めるのは、報酬に見合うだけの仕事です。給料の減額が単なるパフォーマンスにならないか、そうしたことも懸念されるところであります。

おそらく、議場にいた川合市長以外の全員が、条市議のこの発言に心中で力強く同意したことだろう。だが、川合市長のとんでもない本性が頭をもたげたのは、条市議の**「特別職の給料の減額によりどのような効果があるか？」**との質問での答弁である。

川合善明市長

ご答弁申し上げます。今回の減額により市民の皆様には、本市が厳しい財政状況であることや行財政改革が必要であり、現在それに取り組んでいることを知って頂く機会になると考えております。また職員は、より一層の緊張感を持って一丸となり行財政改革に取り組む姿勢を進めることであると考えております。

本件減給議案を提出した理由を問われて**「全庁的行財政改革」**を挙げた川合市長が、数分後には、市の財政が厳しいことを市民に知らしめることが、市長とその支配下にある特別職らの減給の効果だと言うのである。

「市民の皆様」に、川合市政の**「全庁的行財政改革」**だの厳しい財政状況の責任などあろうはずがない。すべて川合善明市長の行政能力の欠如が招いた現状に、市民の側が理解を示す義理など毛頭ない。決して治ることがない自己中心の権化たる川合市長の**「おれ様答弁」**に、条市議も即座に反応した。

条真美子市議

先程のご答弁で確認したいことがありまして、3回目の質疑をさせて頂きます。

市長は今、市民の皆様に本市は厳しい財政状況であること、また行財政改革が必要であり取り組んでいることを知って頂く機会になるとご答弁されていました。

財政調整基金残高が7,000万円を切るまでの厳しい財政状況になったのは、川合市長の12年にわたる市政運営によるもので、コロナ禍で困窮する多くの市民にことさら示し、意思を負わす必要があるのか疑問に感じたところです。

先のご答弁が意味するところは、市長が文字通り身を切る改革を進めることにより、今後、例えば行政サービスが低下し市民に不利益が生じることがあったとしても「理解をしてください」と示唆するものでしょうか。

この本条例の目的が関わることですので、減額の効果で市民に不利益が生じるようなことがないか、この点だけ念のため市長に確認させて頂き、私の質疑といたします。

市長答弁をその場で批判した条市議の直言は、まさに正論であり、議論以前の問題として、自治体首長の職責のなんたるかさえ理解しないまま**「市長職」**を続けてきた川合善明という人間の闇そのものを突いている。怒り心頭の様子が見て取れる条市議の重ねての質疑に対して、川合市長は次のとおり、いつもの開き直りで答弁の幕を下ろしたのである。

川合善明市長

ご答弁申し上げます。

現在、行財政改革にかかる取り組みの方向性や内容を整理検討している状況でございますので、現時点におきましては具体的な内容は決められておりません。

条真美子市議

通常３回目までというところで、４回目の質疑となりますがご容赦頂きますようお願い致します。先程の私の質疑と致しましては、減額の効果により市民に不利益が生じることはないか、この点だけ確認させて頂きたいと思いまして、改めてご答弁をお願いしたいと思います。

川合善明市長

ご答弁申し上げます。私が申し上げたのは、現時点においては、その点を含めまして、まだ何も決まっていないというところでございます。

本件減給議案の理由を問い質され**「全庁的行財政改革」**に取り組む姿勢を市民に知らしめる効果があるからなどと嘯いた挙げ句、結局、何も決まっていないが、とりあえず減給はするという馬鹿げた茶番であることを、川合市長は、これもまたいつもの自家撞着を意にも介さず、平然と言ってのけた。**「処置なし」**との様相で条市議の質疑が終了し、採決では異議もなく全員一致で本議案は可決された。言うまでもなく、市議を全員一致させた理由は**「市長と自称できる実績など皆無に等しいのだから、給料の 20％カットなど当たり前だろう」**という意味での皮肉であって、誰も川合市長の決意だとも誠意だとも認めてはいないだろう。

参考までに、本議会で可決となった特別職の給料減額の詳細を下記一覧表にまとめてみた。

	２年間での減給額
市　　長	7,888,876 円
副　市　長（２名）	3,293,776 円×２名
教　育　長	2,944,548 円
常 勤 監 査 委 員	2,069,636 円
上下水道事業管理者	1,389,564 円
合　　計	20,880,176 円

２年間でおよそ 2,000 万円となる金額は、これが６名分の特別職の給料からの減額という意味では、なんら改革に向けた意思表明などと言えるものではない。

６月議会前半の見どころ**「川合市長の市民呼び捨て問題」**は

本紙の予想を超える反響を呼んでいた

さて、今回６月議会前半の見どころは、小林薫市議による**「市長の政治姿勢を問う」**一般質問であった。**本 紙 既 報** のとおり、市民を呼び捨てにする言動について小林市議から問い質された川合市長は、見当違いの中国故事を持ち出して**「私が呼び捨てにする方は、私が青い目を向けるべき人とは思えないからです」**などと放言し、自分が気に入らない市民は公に**「呼び捨て」**で名指ししても問題はないと得意になって言明した。

実は、川合市長のこの発言後、６月 18 日に本紙は、川越市教育委員会を取材していた。編集方針から、６月議会をその最終日に振り返る主旨で掲載される予定の本稿はあらかじめ用意されていたが、この間にもメールを中心に**「市長の呼び捨て」**に関する多くの意見が本紙に寄せられていた。いずれも、市長という立場でありながら**「自分の気に入らない人間を呼び捨てにして何が問題なのか」**と議会で言い放つ川合市長の人格を非難する義務教育児童・生徒の保護者層の意見が多数で、少なくとも**「市長が正しい」**という投稿は１通もなかった。

小中学校では男女とも**「さん」**付けが主流

川合市長の、人 権 意 識 の異常な欠落

本件取材に応じたのは川越市教育委員会・教育指導課である。小中学校の児童・生徒が互いを**「くん･さん」**付けで呼び合うことについて、川越市ではどのような取り組み、体制を実施しているのだろうか？

川越市教育指導課

川越市では、学校によりますが、ある学校では一人一人を大切にしていこうということで、全員「さん」付けで丁寧に呼んでいこうという学校もあれば、「くん･さん」と付けて呼んでいこうという学校もあります。

具体的な校名は挙げられませんが、「さん」付けて呼び合う小学校は、かなり多く、人権やジェンダーの観点から、一人一人を大切にするということで、男子も女子も「さん」

付けで呼んでいる教育現場が主流になりつつあると言っていいと思います。中学校でも、その動きは少しずつ増えていて、学校単位でなくても教師個人の教育方針としても「さん」付けのほうが増えてきているかと思います。

これら**「さん」**付けの動きは、市の教育指導が形勢を後押ししているわけではなく、特に人権に対する国際的な共通認識として、同時多発的かつ自然なかたちで子供たちの社会に定着しつつあるようだ。川越市でも**「今のところ市の統一したガイドラインといったものはなく、学校ごとにやってもらっています。」**という。

言い換えれば、小学校児童たちでも日常生活のレベルで人権意識を身につけている 2021 年の今現在、自治体首長でありながら**「気に入らないヤツは呼び捨てで当然」**と居直るも同然の暴言を議会答弁で言い放つ川合善明市長は、果たして正常な人間と言えるだろうか？

「人権教育という大きな括りの指導は徹底してやっていく方針ですが、その中で「さん」付けをやっていく学校が多くはなっています。」と答える川越市の教育指導課に、６月議会での川合市長の「**呼び捨て開き直り発言**」の是非について尋ねると、取材当時はまだ議会答弁を知らなかった担当課職員は**「ああ…そうなんですか」**と気まずそうに表情を曇らせた。

市民は首長の異常性を真剣に憂慮すべき

男子・女子ともに互いを**「さん」**付けで呼び合う、**「さん･さん」**付け呼称については、**「さん」**付けによって、学校生活全体の言葉遣いが穏やかで優しいものに変わっていくとの研究もある。この６月議会で、川合市長に対して小林薫市議が追及した本件**「呼び捨て」**問題の根本は、単に言葉遣いと態度にあるのではなく、人権の問題である。

仮にも 35 万川越市民に市長職を許されている川合善明市長という公人は、市民に限らず自分が嫌いな人間は公然と**「呼び捨てで問題が無い」**と議会発言する、他者という存在と人間関係を形成し育んでいくコミュニケーション能力が完全に欠如しているという事実が、わかりやすく顕現したものが本件川合市長による市民**「呼び捨て」**問題の本質なのである。

川越市民でもある本紙社主･松本も、川合市長に侮辱的な「呼び捨て」で名指しされたが、それは小学生児童の口喧嘩の次元で、いつまでも市長の揚げ足取りで本件問題を何度も糾弾するのではない。一般市民も議員も、また本紙読者にも改めて申し上げたい。

本件問題は、本紙と川合市長の感情的な確執という私的なものではない。

念のために、もう一度指摘しておこう。

本議会で小林市議に質疑された川合市長の答弁は以下である。

「私が呼び捨てにする方は、私が青い目を向けるべき人とは思えないからです」

何度か読めば、この市長発言の人間離れしたと言えるほどの異常性に気がつくはずだ。すなわち、市長たる立場の者が市民を公然と名指しで**「呼び捨て」**することを、川合市長は当然のことのように前提にしているのだ。川合市長の口から出た言葉が中国故事を模した間接表現であることなどは、問題の本質とまったく関係はない。川越市長の名において、自分を批判する人間には人権など認める必要がないと公言したことが問題の本質なのであり、他者という存在と人権になんらの価値も抱かず、人権という概念さえ理解できない、川合善明市長の破綻した人間性と精神性がこの問題の本質なのである。

本議会最終日に唐突に提出され可決された、市長以下特別職の減給も、先述のとおり、川合市長の思考の形跡は見受けられない思いつきに過ぎない。そればかりか自身の 12 年間の市政運営のツケを棚上げにして、給料の減額は**「市の厳しい財政を市民に知って頂く機会となる」**などと、話を自己犠牲にすり替える始末だ。

市長としての 12 年間の言動の、ほぼ一言一句、一挙一動が矛盾と無責任と無能力に終始している自治体首長は、川越市長・川合善明氏のほかに見つけることは困難である。

小学生でも人権意識を身につけている時代に、その小学生の給食費無償化を公約に掲げながら放り投げては開き直り、市民への**「呼び捨て」**を追及されても**「それがどうかしたのか？」**とばかりに聞き捨て、市長席に座るだけの等閑した市長職で暇を潰しては、やがて市民の血税による巨額の退職金を手に庁舎を去るその日まで**「おれ様市長」**川合善明氏の暴言と虐政が止むことはないだろう。

無論、だからといって川合市長に**「天上天下唯我独尊**（てんじょうてんげゆいがどくそん）」を気取ってもらっては困る。釈迦は生まれてすぐに七歩あるき**「世界で私だけが尊い存在である」**と言ったという。釈迦であれば、そう言っても誰も批判しないだろうが、川越市長が唯我独尊では**「身の程知らず」**も度が過ぎるというものだ。

特に川合市長は、あらゆる点で市長の能力を欠いたまま、ただ馬齢を加えるがごとく、市長室を出入りしているだけも同然なのだから、市長退職金 1 億円も分不相応と言うべきだろう。**次期議会では、市長退職金の全額寄附を定める条例を上程してはどうか。**